

蘇芳集



龍の玉

高橋 さえ子

秋の暮

青山

丈

日の当る水尾をひらきて通し鴨
水草の鉄気帯びたる秋暑かな
てとらぼつどの乾ききつたる秋意かな
旅愁ふと小舟漕ぎ出づ秋の星
天日に水漬きて黒し枯蓮
かたはらの川音寒し待ち合はせ
面影や龍の玉探してもさがしても

咲き出した処で枯れて曼珠沙華
今朝も僅かな朝顔の種を採る
冬になる前に金魚の水を足す
二三日晴れて鶏頭抜かれけり
鶏頭の抜かれた跡の水たまり
火点して窓の四角の秋の暮
初冬の畑の中に人がをり

猫じやらし

野路 斉子

拾ひ足す団栗一つまたひとつ
猫じやらし何んだか好きで猫ではなく
運動会帰りは祖母の自転車
で末枯の暗さ明るさ風次第
コロナ禍の続く冬眠してしまふ
塀 囲ひされて冬眠中の森
冬蝶の思はずの黄の濃かりけり

ねんごろに

前田 陶代子

露草の色に踏み今日が始まる
水音に草のなびける厄日かな
水際へ日の階秋のころもがへ
野の椅子の節のいくつや火恋し
板塀に影のこつんと鶏頭花
考への覚束無くて蓮の実
ねんごろに言葉紡ぎて露けしや

きりぎりす

宮尾 直美

町なかの鳥居小さき葉鶏頭
銭湯も劇場も消えきりぎりす
しろがねの水尾曳く鯉や寺の秋
風吹いて風吹いてなほ芒原
死生観聴くをりをりに遠き賜
この辺り神域といふ花野かな
流木は人の形なまして秋の風

柿 明り

八木下 末黒

眸忌の句座の日暮里露けしや
秋深き鶯谷の線路際
日輪のかけらや一つ曼珠沙華
芋坂を上ると墓の乱れ萩
足元の香煙わやと秋の風
子規庵の路の一軒柿明り
子規庵の閉ざされてゐる冬隣

比翼塚

吉田幸敏

登高や眸日和の師の墓域
師の墓へ行く秋日傘さしてゆく
澄む秋の墓前に集ふ三回忌
眸忌の墓の低きに踟みけり
比翼塚永遠の眠りのさはやかに
久闊や葛の葉かくも翻り
色変へぬ松けざやかに師系あり

花芙蓉

小川美知子

先生の到着を待つ花芙蓉
真夜に飲むわづかな水も秋のこと
雑然と庭暮れてゆく榎櫃の実
鳥渡る A T M に長き列
人もまたそよいでをりぬ曼珠沙華
鬼ごつこの声の散らばる夕紅葉
さやけくて編集長の赫い服

一葉の秋

木内憲子

永遠といへば秋立つ泉かな
新酒酌むさしたることのなけれども
百草の花やこころはすぐ雨に
秋麗の胸の裡なる静けさよ
水音を離るるたびの一葉かな
雁渡るらし彼岸とは此岸とは
友の訃の一葉の秋を心にす

神鈴

小島みつ如

ドライブの箱根八里や薄紅葉
スカイウォーク秋の蟬声漂へり
秋日燦社殿金箔ことさらに
九月暑し神鈴の音のこもりがち
大社残暑木蔭に鳩のみな黙し
鈴の音の小さきお守り求め秋
星月夜老の足搔きの修まりぬ